

磐城石川附近風土雜記

菅谷泰昌

○氣候 磐城石川小學校觀測所に於ける大正十五年年度の調査は左表の通りである。

| 月別 | 雨量 | | | 風 | | | | 温度 | |
|-----|-------|-------|----|----|----|---|------|--------|--|
| | 總量 | 最多量 | 日數 | 無疾 | 和軟 | 強 | 最高 | 最低 | |
| 一月 | 四、〇〇 | 四、〇〇 | 一 | 八 | 九 | 〇 | 四、七 | 零下、五、九 | |
| 二月 | 三、三〇 | 三、三〇 | 一 | 七 | 八 | 〇 | 四、七 | 零下、五、九 | |
| 三月 | 五、一〇 | 一四、五〇 | 七 | 三 | 四 | 五 | 六、七 | 零下、二、五 | |
| 四月 | 一七、〇五 | 八五、〇〇 | 八 | 一 | 四 | 二 | 九、五 | 零下、一、五 | |
| 五月 | 一七、〇五 | 三〇、五〇 | 七 | 一 | 三 | 三 | 一五、一 | 四、一 | |
| 六月 | 六、三〇 | 一七、〇〇 | 七 | 一 | 七 | 三 | 二二、六 | 五、六 | |
| 七月 | 一五、五〇 | 三三、八〇 | 七 | 九 | 二 | 〇 | 一四、三 | 一〇、九 | |
| 八月 | 八、四〇 | 四七、五〇 | 五 | 三 | 一 | 〇 | 二八、八 | 一六、七 | |
| 九月 | 八、六〇 | 一九、〇〇 | 三 | 二 | 一〇 | 五 | 三〇、四 | 一九、七 | |
| 十月 | 八、九〇 | 一四、六〇 | 二 | 一 | 三 | 二 | 二五、三 | 一六、七 | |
| 十一月 | 一四、五〇 | 八、五〇 | 五 | 八 | 六 | 二 | 一六、七 | 六、一 | |
| 十二月 | 三、七〇 | 三、〇〇 | 二 | 七 | 六 | 二 | 四、六 | 零下、三、一 | |

磐城石川附近風土雜記

○地質 石川町附近の地質は變成岩、水成岩、火山岩に大別することが出来る。變成岩に屬するものには片麻岩及雲母片岩の如きものにして此種の岩石は所謂領家片麻岩系に屬するものである。

水成岩に屬するものは多く新しい時代の沈澱成層に成る第四期層の洪積層及沖積層より成るのであつて、洪積層は石川町の西邊に臺地を爲して發達し沖積層は溪澗の流域の中、北須川、今出川に於ける河成沖積層が是れである。火成岩に屬するものは花崗岩であつて花崗岩は其各所に Pegmatite を挾んである。

此の Pegmatite が石川をして稀有礦物即ち水晶、長石等の産地として知られて居る所以である、此の地方は花崗岩地帯とも云ふ可き區域であつて其大部は此の岩石によりて占められてゐて、古來から

石川に過ぎたるものに四つあり、坊主山ふじ石からすと云はれた有様である。以上は斯界のさる學者からも聞いた説である。

然して石川郡に産出する鐵物を石川郡誌によりて擧げて見やう。

| 名稱 | 色 | 光澤 | 成分 | 産地町村名 | 摘要 |
|------|-----|----|---------|------------------------------|------------------------------|
| 白色石英 | 無 | 玻璃 | 硅酸 | 石川、野木、須釜、野木、山橋、大森、田須 | 花崗岩、片麻岩、石英斑岩等ニ存ス |
| 黑色石英 | 黒 | 同 | 同 | 石川、野木、野木澤、石木澤、野木澤 | |
| 黄色石英 | 黄 | 同 | 同 | 石川、野木、野木澤、石木澤、野木澤 | |
| 紅石英 | 淡紅 | 同 | 硅酸化チタン | 石川、野木、野木澤、石木澤、野木澤 | |
| 紫石英 | 紫 | 同 | 同 | 山橋、石川、野木、野木澤、石木澤、野木澤 | |
| 乳石英 | 乳白 | 同 | 同 | 石川、野木、野木澤、石木澤、野木澤 | |
| 鐵石英 | 赤褐黄 | 脂肪 | 硅酸化鐵ヲ含ム | 阿武隈川、野木澤、野木澤 | 地上ニ露出散在シ又ハ河岸ニ散在スルモ赤玉ト稱スルモノ是也 |
| 石英砂 | | 玻璃 | 硅酸 | 小瀬川、野木澤、石川、野木、須釜、野木、山橋、大森、田須 | 地表ニ散在スルモノナリ、花崗岩ノ崩解セルモノヨリ出ズ |
| 水晶 | 無 | 同 | 同 | 石川、野木、須釜、野木、山橋、大森、田須 | |
| 紫水晶 | 紫 | 同 | 同 | 石川、野木、須釜、野木、山橋、大森、田須 | |

| 輝鐵 | 電氣石 | 黒雲母 | 白雲母 | 正長石 | 羊蛋白石 | 木蛋白石 | 五 | 瑪瑙 | 黒水晶 |
|----------------|----------------------|-------|------------------------|--------------------|----------|--------------------------|---------------------|--------------------------|----------------------|
| 石緑、黒 | 濃緑、赤、白 | 暗緑、黒褐 | 白淡、淡、黄、紅 | 白黝肉 | 黄褐色 | 色種々アルモ黄褐色 | 白、黄、赤、黒、紫、緑、青、赤、紫、黒 | 白、灰、黄樹赤、脂肪 | 黒煤褐 |
| | 脂肪 | 同 | 眞珠、眞珠、眞珠 | 眞珠 | 同 | 脂肪 | 同 | 脂肪 | 同 |
| | 十二元素ヨリ成ル複雑ナル硅酸鹽 | 同 | カリウムノ含水硅酸鹽 | 玻璃加里ノ硅酸 | 同 | 含水 | 同 | 同 | 同 |
| 蓬田村 | 石川、野木、須釜、野木、山橋、大森、田須 | 同 | 石川、野木、須釜、野木、山橋、大森、田須 | 山橋、須釜、大森、田須、野木澤、山橋 | 北須川、阿武隈川 | 野木澤、石川、野木、須釜、野木、山橋、大森、田須 | 泉 | 野木澤、石川、野木、須釜、野木、山橋、大森、田須 | 石川、野木、須釜、野木、山橋、大森、田須 |
| 本礦ハ陽起石ナリト云フ學者ア | 花崗岩片岩等ニ存ス | | 花崗岩、片麻岩、雲母片岩等ニ存ス、結晶力アリ | 花崗岩ノ多量ニ産スルモノナリ | 稀ニ認ム | | | | |

うか。

此附近の住民の移住線路に就いては姓氏考の項を参照せば
幾分察するところあらんと思ふ。

○家屋に就いて 石川町を中心とせる此地方の住家の間取は
概ね下圖の様式である。圖は野木澤村鹽澤曲山某氏の邸宅で
ある。

此邊の習慣として 入口の方を眞南に向けることを嫌ひ、
可成辰巳の方へ向ける様にするのである。又縁側等は押組に
張る。

一體近畿の方は燕口の張方を爲し關東方面から、こちらに
掛けては押組に張られる傾向がある様である。

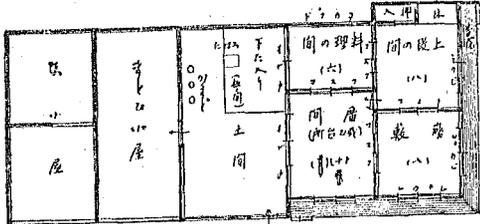
戸袋の作りを「センカイ」作りと云つて面白い曲線を使つて
ゐる。又挿木の小口は青い顔料で塗つてゐる。

「まとひ」小屋と云ふのは、纏め小屋の轉訛であらう。農作
物や農具の物置のところである。圖中部屋々に書き入れた
名稱は此邊の俗稱を著したものである。料理の間と云ふのは
疊が敷いてあつて、納戸の役をしてゐる室である、廣間と云
ふてゐるのは、北陸、近畿邊で云ふ「テイ」で板の間の「茶の
間」である。一體に奥行の長い家が多く、甚だしいのは其長
さ四十五米突に及びしものがあつた。

石川附近の屋根のタイプは隣郡田村郡守山、谷田川附近の
と(本誌第六卷第三號に掲出す)同様である。棟の小口(此邊
では俗にサスと稱してゐるらしい)の火燈形にして八字の匾

劃ある型式は隣國常陸國久慈郡の上小川驛附近を中心として
多く存在してゐる、即ち該地方から將來されたものでなから
うか。糊倉に僅かに此の

第一圖



型の影を留め、此から以
北には、もう此の型は見
ない。私の狭い見聞では
此の火燈八字式の型は尙
上總一宮附近と上總興津
附近及び相州鎌倉の郊外
で見た。

石川附近の凡ての渡邊
姓は其屋根に樓煙出しは
勿論の事、一切其他の煙
出しを作らぬ習慣がある
とのことである。

○地名考 石川郡或は
石川町の地名に就いて些
か發言を費やさう。和名
抄には巴に白河郡の中に
石川なる郷名を挙げたれ
ば古くから此名があつたらしい。吉田東伍博士は現今の澤井
村、山橋村、石川町の地が當時の石川郷であつたらうと考證
されてゐる。南北朝時代の一、二の古文書に石川郡と記され

しもの見ゆれども之は地方の豪族の類が私かに稱したものであつて當時は石川庄と呼ばれ兩は今の東白河郡宮本村竹貫村、鮫川村より北は泉村に至り西は淺川村西白河郡滑津村、中畑村とか東蓬田村須釜村に渉るの地域を汎稱したものであらうと石川郡誌等にも言はれてゐる。而して白河郡より分立して石川郡と稱せらるゝに至りしは文錄以後慶長年間なのであらう。

和名抄時代から石川なる郷名は存したらしいが是を擴大して遂に白河郡から分立せしめて郡名に迄になりし原因は石川氏五百年廿四世の治下なりし故であらう。

即ち石川氏は多田滿仲の孫頼遠、有光を祖とし河内國石川郡泉莊を食んでゐた、前九年の役に此地方に戰つて功あり康平六年當地石川庄を賜はり奥州山東の軍事を司り從五位下安藝守に任ぜられ、石川庄に三芦城を築いて君臨した。石川氏の系圖には、此時白河郡内改三石川郡と云つてゐる。

恰も天正年間に攝洲佃島の漁夫達が武藏の一角に移住し附するに故郷の名佃島を以てし藤堂和泉守が其居城甲賀の上野の地名を江戸の屋敷にも移せるが如く石川氏も故郷を忘じ難く舊領の地名を望みしか或は故郷の名を特に擴大して系圖にあるが如く白河郡内改三石川郡とせるに至つたものか。因に石川氏菩提寺の存する處を泉村と稱す、これも河内泉莊に因みて名付けられたものであらう。

石川氏より出でたる一族に泉氏、藤田氏、大寺氏を稱する

ものは皆此附近の泉村、藤田、大寺等に居を構へしを以て其地名を冠せるものである。

○姓氏考 石川町は宇五十二、三を有するも古來之れを四部落に分類してゐる、即ち其各項に分ちて按じて見やう。

○磐城國石川郡石川町高田 瀬谷、西牧、中村矢内、鈴木、近藤、近内の諸氏多し就中瀬谷、西牧、中村の三氏は舊家であると云はれてゐる。

○瀬谷氏—原因未詳 西牧氏—信濃より起りし木曾義仲の次子義重の男義信の後也と稱するものがあるが果して之に類するものゝ裔か。

中村氏—此姓氏は其種類甚だ多くして今一途に判じ難きも當地附近より起りたるものゝみを舉げて他山の石とせしやう。

一、陸前 吉彌侯部裔なる上毛野中村公なるものがある新田郡中村郷より出づ。

二、常陸 鹿島郡中村郷より出でたもの

三、同 眞壁郡中村から起つた藤原北家山蔭流と云ふ一族がある。

四、武藏に起れる平良文の裔なる江戸氏族中から出たもの

五、武藏から起つた春日氏族横山黨及丹黨族のもの

六、安倍氏族佐々木氏流から出たもの

矢内氏—出自未詳
鈴木氏—此地方は石川附近に限らず郡山、守山方面に於ても此姓氏甚だ多し。

鈴木氏は其出自の種類甚だ多い。私の考へるところでは、此地方は延暦年間坂上田村麻呂の鎮守府將軍として來た所で永正年間迄其子孫田村氏は田村郡守山に居城して武威を奮つて其一門一族の繁榮した所である。

所で坂上氏は抑も漢高祖皇帝の裔で其支流に坂上土師氏があり其の土師氏から出てゐる鈴木氏がある。即ち田村麻呂の子淨野は其曾孫古哲に至つて田村氏を稱してゐる即ち守山の田村氏の祖である、淨野の弟正野の曾孫は河内國にあつて、土師氏と稱せられ其子は鈴木三郎維親と云ふて鈴木氏の祖となつてゐる。で此地方の鈴木氏の祖は是れであつて、田村氏を頼つて來、田村氏の繁榮に伴ふて寄生的に蔓延したもので無いかと思ふのである。

綠川氏―出自未詳

矢吹庄に住せる綠川源左衛門なるもの安政二年に舊主石川

義光(石川氏十四世)の建碑を其筋に願出た文の中に

「私先祖は石川家御連後守光顯公より代々大將家御一族にて綠川出に御座候處大和守昭光公御代に至り天正十八年石川御立除き後宗家綠川刑部様は御當地(伊具那角田のこと)へ引移り其分流等は御細領又は近國近郡に土着罷在候云々」

とあるに依りて知られるが如く綠川氏は石川氏或は氏の一族の重臣なりしこと明かにして石川氏伊具那角田に轉封するや綠川氏の一族も共に移りしもの殘留せしものとありて

當地のは即ち後者に屬するものであつて現石川町長綠川喜一家も後者に屬する石碑を持つてゐる。紋は丸の中に吉の家字である。

近藤氏―概ね藤原北家から出でたもの多く異種として僅かに甲州より起れる清和源氏武田氏族と信州より起れる村上氏族、豊後に起れる三輪氏族緒方氏流あるのみであるが最も種類が多いのは江州から起つた秀郷流の氏族と云はれてゐる。此の近藤氏は其何れより出でたるか。

近藤氏―所因未詳

〇同上石川町下泉

鈴木、溝井、三瓶、小豆畑、吉田、荒川等の姓氏多く就中舊家と稱せらるゝは鈴木莊右衛門家。溝井氏の二氏である。鈴木氏は上記の如し。

溝井氏―所因未詳

三瓶氏―所因未詳

石見國安濃郡に三瓶山あり往古は佐比賣山とも形見山とも稱せり、又石見、出雲地方にも此の姓を見たる記憶がある三瓶は竿部えいべに音通ず。元來竿部とは算道の事に與る女人を云ふものであるらしい。類聚符宣抄第七に出でたる竿部保理なぞ云へるは即ち此の種の職業婦人の裔なのであらうか其竿部の三瓶に變じたるか俄かに斷じ難きも後考の料にもとて擧げて見た。

此姓氏は安積郡笹川邊の阿武隈川沿岸にもあり。

小豆畑氏一姓氏錄未詳雜姓和泉の部に小豆首（吳國人現發臣之后也と見ゆ）及び此の裔なる小豆氏及び羽後鹿角郡小豆澤より出てたる小豆澤氏のみは知られてゐるけれど此姓あるを見ず。

吉田氏一田村郡守山町大字守山にも此姓多し、本誌第六卷第三號磐城守山附近風土雜記中の姓氏考を參照

荒川氏一概ね清和源氏にして藤氏秀郷流之に亞ぎ他は僅かに安倍氏族がある。當國磐城郡荒川郷より起れるもののみ獨り桓武平氏にして磐城氏族である。即ち此氏に屬するか又安倍氏に因めるか。

○同上石川町外權

泉。前田、小松、有松、遠藤の姓多し。就中、泉重左衛門家は舊家と云はれてゐる。

泉氏一當國より起りたる泉氏に二種あり

一、相馬郡泉より出でし相馬氏族

二、石川郡泉村より出でし石川氏族

當地の泉氏は當然後者であらう。尙地名考の項に於ても述べてある。

小松氏一羽前から起つた安倍氏族のものがある。

有松氏一所因未詳

遠藤氏一攝津、遠江に其氏族多し。今其何れなるや知り難きも倭漢氏族の坂上士師氏即ち田村氏の支流鈴木氏の先は攝津にありし事あり（其子孫今尙攝津に止まれるもある）又石

川氏の攝津河内地方より起れるを知れば幾何か一縷の裔縁を藏するが如く思惟されぬでもない。

○同上石川町新田

鈴木、大平、矢内の姓多し。然して鈴木、矢内の兩氏は前項に既に述べてある。

大平氏一岩代から出たものにオホタヒラと訓するのがある。

天武帝の裔高階氏族である。下野から起つた藤原北家宇都宮氏族はオホヒラと訓してゐる、但し高階氏族でもオホヒラと訓してゐるものもあるらしいが其起りたる地を明かにしない。

○同上石川郡野木澤村中野

近内、二瓶、圓谷の姓氏多く僅かに矢吹氏が比較的多く混つてゐる。近内氏は前條石川町高田の項參照のこと。當地に於て、近内氏は其同姓二十五、六戸の大きに達す。

二瓶氏一二十五、六戸あり其宗家は當地に於て最も舊家と稱せられ現在十六七代に及ぶと云ふ、所因未詳。

二瓶氏に音相通する姓に贊氏あり、伊豫から起り其先、贊首であつて武内宿禰葛城臣の族と稱せらる。

又贊氏に藤原氏と稱する氏族がある家紋數瓦の内に三頭左

巴鈎鐘

又古往磐城郡の豪族に贊田氏がある。

當地の社家二戸は二平と書き習はしてゐる。圓谷氏一十軒計あり所因未詳。

矢吹氏―石川にも僅かに此姓がある。所因未詳、白河古事考に淺川に居城してゐた矢吹薩摩守なるものゝ名が見へる。又角田氏の裔であつて清瀬源氏と稱する矢葦氏と云ふのがある家紋丸に七本矢車。又白河以北に矢吹なる地名あり併せ記して後考の料に充てやう。

○同上野木澤村鹽澤

曲山、有賀の姓が多い
曲山氏―此の姓氏は泉村蘇生しゅうせい。中谷村形見にも多くある。然して所因未詳。

秀山鑛泉から約五百米突西方の鹽澤部落に曲山源助氏と稱する家がある。此家の裏山に此家の祖先の墓と稱するものがある。蘇苔文字を没して明かにせざるも次の如き字を讀み得られた。

文明十五癸年

風樹院殿高慶源公大居士位

人皇三十九代天智天皇□ 鹽澤

□先 吉村

(面裏)

□□□三年卯八月十一日 曲山但馬守正義

有賀氏―東鑑承久記等に出てゐる有賀四郎父子四人云々の族の裔では無いか。

若し此の族とすれば厥先信州諏訪明神より出でたりと云つて居る出雲神族であらう。

磐城石川附近風土雜記

○民謠 松川二郎氏は磐城七郷村(田村郡にして内澤、堀越

遠山澤、永谷、牧野、栗出、栢山)の盆踊りは姫奇會即ち歌垣の形式を遺してゐるものであると云はれてゐる。

此地方の盆踊りも果して此に影響されてゐるものか、どうか知らないが其の調子の野趣満々たる中に優雅な捨て難い點を多く見出すのは愉快に感ぜられる。(聞説秋田地方にも其歌詞

と其調子の相似通ひたるものがあり又豊前善光寺附近の盆踊りにも此れに相似たる調子のあるとの事である)然して此地方は盆では無くとも少し人の寄り集まりて興至れば直ちに大太鼓を打叩いて歌ひ踊ることが盛んである。

其歌詞の三、四を擧げて見る。

ハ―そるた〜踊り子が揃ゐたア―稻の出穂よりアラサ―なほ揃ゐた。

ハ―誰が来たよな垣根の外にア―泣いた鈴虫アラサ―音なとめる。

ハ―盆の十六日踊らぬ奴はア―猫が杓子がアラサ―花嫁か。

ハ―傘を忘れた峠の茶屋へア―雨のふる度アラサ―思ひ出すハ―峠参りと内をば出たがア―心峠でアラサ―身は矢吹。

○雜項 子供生れて七日目に命名して次の様に半紙に書いて廣間(家屋の間取圖參照)の長押に貼つて置く習慣がある。

昭和二年一月三十一日生

一、壽 名 貞男

火性男 千鶴萬龜

地球

第九卷

第三號

二六

四八

此の地方の婦人のタイプには美醜を論ぜず多くは俗に云ふ「おこし」であつて顔丸味勝ちである。體格頗る頑強で頬赤く一見懦夫を張り飛びすの概がある。

石川町から東北約三軒の北須川の溪間に母畑鑛泉と云ふのがあつて、上の湯中の湯等と分たれてあて熱れも「ラヂウ・Aエマナチオン」を10⁻¹⁰ C/cm. 單位を以て表せば約四〇

面積

| 地目 | 種別 | 面積 | 地價 |
|----|----|---------|--------|
| 宅地 | 畑 | 八六、〇〇〇坪 | 四、七一一圓 |
| 田 | 畑 | 三九〇坪 | 五、八三三圓 |
| 畑 | 畑 | 三九〇坪 | 九、七〇〇圓 |
| 山林 | 畑 | 三八〇坪 | 三、〇〇〇圓 |
| 山林 | 畑 | 四三六坪 | 二、五二九圓 |
| 山林 | 畑 | 八一〇坪 | 三、〇〇〇圓 |
| 山林 | 畑 | 一〇八坪 | 一、〇九〇圓 |
| 山林 | 畑 | 三三坪 | 〇、〇〇〇圓 |
| 山林 | 畑 | 三三坪 | 〇、〇〇〇圓 |
| 山林 | 畑 | 一歩 | 六、八五〇圓 |

程含有すると云ふ。又石川町郊外に猫啼鑛泉がある。又野木澤村鹽澤に近年開かれた糸山鑛泉がある。共に皮膚病、婦人病等に効があるとの事である。
此地方の産物は何と云ふても蒟蒻と煙草を以て第一とする次に石川町に於ける面積と大正十五年の主要産物の大略とを擧げて見る。

主要産物

| 品目 | 種別 | 數量 | 價格 |
|----|----|--------|---------|
| 蒟蒻 | 馬 | 六、九九八貫 | 五一、六二八圓 |
| 煙草 | 馬 | 五四頭 | 六、九一二圓 |
| 麥 | 馬 | 二、九九八石 | 九〇、三五一圓 |
| 米 | 馬 | 一、二二〇石 | 一三、三二四圓 |
| 蒟蒻 | 馬 | 三、八五九貫 | 九、〇三一圓 |
| 蒟蒻 | 馬 | 三、八五九貫 | 一六、八七五圓 |

備考 煙草ノ價格ハ賠償金ナリ

〇正誤

地球第九卷一八五頁上段第一行の同氏とあるは ARLAW 氏の誤でありました、會員野口喜一氏からの御注意を感謝します。